

通算3万回の往診経験からつづられた 在宅医療の「大切なこと」

[評者]

土川稔美

訪問看護ステーション北沢

この本は、著者の20年にわたる「往診」の日々から生まれた1冊です。

10年以上も前のことですが、本書にも共に働く訪問看護師として登場する宮崎和加子さんが、私の職場(世田谷区衛生部)で、「訪問看護」についての講演をしてくださったことがありました。その時の印象(なんて感じのいい人だろう! どうしてこんなに元気なのだろう?)が心に残っていましたが、これを読んで、そのわけがようやく納得できた思いです。

この「往診日記」は、いわゆる「赤ひげ」話ではありません。通算3万回以上の往診をしてきた結果を積み上げた、「在宅医学書」です。若い医師の方! これを読まないで往診に行っ

てはいけません! と言いたいくらい、大切なことが詰まっています。第1章は事例集。文学的表現をもまじえて書かれており、医師と患者のやりとりが実にのどかです。医療は、患者の生活を知ってこそ、納得できる形になることを感じます。

事例の1つ、下町の八百屋さんのくだりには、エッ?とびっくり。

そのおばあさんは、寝たきりで、老人性痴呆症。川人医師によれば、通常、アルブミン値が2を割ったら半年以内に死の転帰をとるそうですが、この方はジリジリとアルブミン値が低下して1.2まで落ち、生きているのが不思議という状態でも、さらに数か月生きられたそうです。川人先生! それ、私たちが担当した世田谷区の八百屋さんの話ではありませんか?(こっちはおじいさんでしたが)

在宅では、ほとんどカロリーを摂っていないくても、実によい身体恒



常性を発揮して、長く穏やかに生きる方がいるのですが、この例は私たちの経験とあまりに似た話だったので驚きました。

このように、本書に出てくるエピソードは、どれもこれも私の訪問看護体験に重なっていて、思わず膝を打つ思いでした。人が病み、死にゆくときには、同じような経過をたどるということなのでしょう。

私たちと決定的に違うのは、川人医師らの活動が、病院と直結している在宅医療だということです。訪問看護師たちが、これほど患者の生活に入り込んでケアできるのも、理解ある医師や病院のバックアップがあるから?なんて、心底うらやましく思いました。在宅医療を推進するなら、いざ! という時に気持ちよく受け入れてくれる病院がないと、安心できません。行政の責任において何とかしてもらいたいことでもあります。

また、本書には、ある末期の患者について「今度は死なせようとは僕は思う」など、勇気ある発言がいくつかあり、胸のつかえがとれるような思いでした。川人医師が、何を根拠にこういうことを言い、判断をしたのかは、きちんと説明されています。ほかにも、「3日間の少量輸液で回復の可能性を判断する」という方法は、家族を納得させる、「安らかな死を迎えるための真の医学」であると感動しました。

「言葉は医療なり」なんて言葉があったか? なかったか? 川人医師が患者さんと交わす言葉は、真摯で、素敵です。ALSの方が、ワープロのモニターで「てんごくにいかせてください」と訴えるくだりは、息をのんで読みました。その後、どうなったのか知りたいです。

この本を読んで、柳原病院の医療チームが、今のような在宅医療の制度がない頃から、必要に迫られて必死で地域医療に取り組み、提言してきたことの積み重ねが、介護保険制度の理念につながっていることが、よくわかりました。冒頭で話した宮崎さんのエネルギーのもとになったのも、「日本の医療・福祉は、このままではいけない!」との、岩をも通す使命感だったのでしょうか。

介護保険制度5年目。この間、わがステーションの若いナースたちは、まぶしいくらい成長しました。このことをとってみても、在宅ケアを支える介護保険制度は、日本社会を成熟に導くカギになると信じています。

本当は、もっと早くにこの本に出会いたかった!